

事後評価報告書(日-タイ研究交流)

1. 研究課題名:「LTBI 検出のための新規血清学的アッセイの開発と LTBI 根治薬もしくは結核再燃防止薬の開発」

2. 研究代表者名:

2-1. 日本側研究代表者:大塚製薬株式会社 微生物研究所 所長 松本 真

2-2. 相手側研究代表者:国家遺伝子工学バイオテクノロジーセンター 研究員

Saradee Warit

3. 総合評価: (A)

4. 事後評価結果

(1)研究成果の評価について

相手国であるタイで天然物へのアクセスが出来なくなったことにより、新たな治療薬候補の探索研究の継続が実施することができなくなったのは残念である。しかし、Candidate A, B, C, D の 4 種類を組み合わせることで、90%を超える感度で結核診断ができる可能性を示すことができた点、イムノクロマト技術(ICT)を応用して簡便なインターフェロン γ (IFN γ)測定系を作製した点は評価できる。また、スポリゴタイプング法により北京遺伝子型結核菌株とそうでない物が 100%鑑別できたことも有益な成果といえる。今回の臨床検体はインドネシアの結核患者で行われているが、タイと日本の結核患者の検体との比較が行われたらなお良かったと思われる。

(2)交流成果の評価について

日本側とタイ側の多くの研究者がそれぞれ相手国の研究室を訪問し、実質的な交流成果が得られた。具体的には 23 種類の嫌気下ドーマント期に発現している抗原の絞り込みを行ったタイの研究者と、ELISA キット作製ノウハウを有する日本側研究者の協力により作製されたこれらの抗原を検出するキットを活用して、結核感染の診断に役立つ可能性を有する抗原が同定されている点は両国の交流による成果として評価される。

(3)その他(研究体制、成果の発表、成果の展開等)

ICTを用い、すでに確立されている従来法(ELISA)と同様の感度と特異度でIFN γ を検出できるキットを作製した点は、実質的な成果として高く評価する。治療や発症を予防できる新しい治療薬の探索も、今後さらなる発展を期待したい。また、本事業で開発された診断法については特許申請されることが望まれる。